

令和3年度 学校評価結果

学校法人 高松学園
幼保連携型認定こども園 慈光幼稚園

昨年度に続き今年度も「新型コロナウイルスの感染防止」のために、様々な園行事の制約等を余儀なくされましたが、前年度の反省等を元に園児にとっての最善を考え、できるだけ行事が行える方向で運営してまいりました。そのような中、1月の冬季休業明け直後に、園内での拡大を抑えるために休園措置をとらせていただくことになってしまい、保護者の皆様をはじめ地域の皆様、多くの皆様にご心配とご迷惑をおかけしてしまいました。2週間にわたる長い休園でしたが、保護者の皆様からのあたたかい励ましの言葉やお気遣い、休園へのご協力をいただくことができましたこと、改めてお礼申し上げます。

この度、保護者アンケートや教職員の自己評価等の集計を基に、学校評価委員の皆様からご意見をいただきました。ここに令和3年度の学校評価結果を公表いたします。

1. 教育及び保育の精神

本園は、認定こども園法及び子ども・子育て支援法（平成24年法律第65号）、児童福祉法（昭和22年法律第164号）に基づいて、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとしての教育並びに保育を一体的に行い、子どもの健やかな成長が図れるよう適当な環境を与えてその情操陶冶を行い宗教的萌芽を啓培し、以ってその心身の発達を助長するとともに、保護者に対する子育て支援をすることを目的とし、次に示す事項を重視して教育及び保育を行う。

- (1) 仏教精神を根底においた、ともに育つ保育を行う。
- (2) のびやかに自己を発揮する保育を大切にする。
- (3) 子どもが自ら環境にかかわってつくりだす遊びを保育の中心におく。
- (4) 教育・保育に関する専門性を生かした保護者及び地域等への子育て支援を行う。

2. 教育及び保育の目標

本園は、乳幼児期における教育及び保育が、生涯にわたる人間形成の基礎、生きる力の基礎を培うものであることを踏まえ、一人ひとりの子どもが、感謝の念を持ち、生きる喜びを感得できるよう、認定こども園法第9条に示された次に掲げる目標の達成に努める。

- (1) 健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること。
- (2) 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと。
- (3) 身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと。
- (4) 日常の会話や絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと。
- (5) 音楽や身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと。
- (6) 快適な生活環境の実現及び子どもと保育教諭その他の職員との信頼関係の構築を通じて、心身の健康の確保及び増進を図ること。

3. 重点目標

- I, 子どもが遊ぶ中で、自分なりに遊びへの思いをもち、発見・試行・想像力の発揮などを通し、発達に必要な体験や学習を、自分なりのやり方で、或いは友達と協力しながら重ねていく姿を大切にする。
- II, 屋外活動を充実させ、園内の自然環境や地域の自然を日々の保育に積極的に取り入れていく。
- III, 保護者と保育教諭等が互いに連携し、協働の精神をもって子ども達の教育・保育を行うようにする。

4. 自己評価項目の達成及び取り組み状況

分野	評価項目	評価	取り組み状況
園の管理	教育・保育目標の周知	A	<p>保護者アンケートの結果から見ると、A（達成されている）B（概ね達成されている）評価が多く、プラス評価が100%に近い数値になっていることは喜ばしいことである。ただし、学年によっては極少数ではあるがマイナス評価を示される方もあり、真摯に受け止め改善を図っていききたい。保育教諭が持つ保育観や教育観が、保護者に伝わっているか、きちんと発信されているかを含め、一人一人の資質向上に向けた努力を重ねていききたいと考える。</p> <p>一人一人の保育教諭が、子どもたちとの活動や生活を、常に子どもの発達や育ちと関連させていく必要があるが、そのための子どもの見取りがまだ浅いのではないかとと思われることもあり、今後の課題として取り組んでいきたい。</p>
	危機管理体制の整備	A	<p>避難訓練等の計画と実施についての安全対策については、保護者アンケートでも今回は高い評価をいただいた。一方で寺の境内に園舎があることから、誰でも敷地内に入れるのではないかとという不安感が例年多かったが、今年度は年度当初に、二人の用務員が外回りの美化整備に携わりながら、園児の安全管理に配慮していることを伝えていたので、例年より「十分ではない」と捉える方は少なかったようだ。また、外回りにいることによって、寺に用事のある方も「いいかな？」と声を掛けて入って下さるなど、外部者に対して実際に、ある程度の抑止力になっていることが分かった。</p> <p>遊具の安全点検を行っているが、修理修繕するだけでなく、担任や職員と一緒に遊ぶ中で安全配慮をしていけるように、常に子どものそばにいる必要性も考えていきたい。</p> <p>今年度コロナ感染による休園があり、事前にあったマニュアル等によって感染拡大を最小限に留めることができた。また、それにより感染させないための注意事項を見直し、年齢によって子どもができること、子どもだけでは難しいから周囲の大人が補うべきことを明確にし、学年・年齢ごとに登園から降園後までの時間や場面に沿った『指導及び注意事項』一覧を作ることができた。これを全て行うことは、かなりの職務増加になるが、管理体制として大切にしていきたい。</p>

教育活動	家庭、地域、情報発信関係機関への	A	<p>今年度も新型コロナウイルス感染防止の観点から、地域との繋がりを持つ様々な行事が中止となっていった。しかし、周辺地域の感染状況によって、安心感がある時期は直接的な接触をしない形での交流を行うことができた。全体としての回数は少なかったが、年長児の経験として良い交流が持てたことはとてもありがたかった。</p> <p>情報発信としては各種通信物の他に、ホームページによって園内の様子を外部に発信することができた。休園中の家庭保育での遊びや、園内の出来事などの情報発信も頻繁に行うことができ、園児の状況なども把握することができた。休園中は園メールを通して様々な配布物の発信及び動画の発信ができ、紙媒体を使わない情報のやりとりができた。それは今後の保育のICT化につなげていける大きな一歩になったのではないかと思われる。</p>
	子育て支援	B	<p>昨年度はできなかった親子遠足を、密になる大型バスでの移動をせず、現地集合解散ができる場所を目的地として、今年度は行うことができた。参観日も1日1クラスの参観を遊戯室の広い会場を使用することで行った。参観は行うことができ、園でのお子さんの様子を保護者の皆様に見ていただくことはできたが、保護者同士の学級懇談会は無かったため、同じ年齢の子どもを持つ親同士が悩みを共有したり共感し合ったりする場がなかった。また、年間通して子どもを中心にした行事は何らかの形で行えたものの、保護者が親睦を図る場となるものが中止となってしまったため、保護者同士のつながりが希薄となり、不安を抱えてしまうことが多くなっていたようである。保護者アンケートにも、コロナ禍で難しいことは承知しているものの、その部分での改善を求める声が複数あった。保育教諭と園児・保護者というつながりはもちろんであるが、親同士のつながりも「子育て支援」の大切な要素になっていることを実感した。</p>
	教育課程・指導計画の共通理解	B	<p>昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点と、「子どもにとって何が一番か」「子どもにとって最善の利益とは何か」という「子ども主体」の原点を大切にしてくる中で、「子どもたちの生活や育ちを止めない」ということも大切にしながら教育課程等を考えた。特に3学期のオミクロン株による第6波では、登園自粛期間が続き、登園している子どもと、自粛に協力していただいているが為に登園できない子どもとの間に、大きな体験の差が生じないように配慮し、指導計画の見直しも行った。</p> <p>感染防止の為に自粛を選択されるご家庭を尊重しながら、分散登園・午前登園といった方法で、短時間でも園生活を楽しめる様に工夫し、子どもの育ちや教育課程を崩すことなくそれぞれの学年や年齢で話し合いができた。</p> <p>例年（コロナ以前）に比べればまだ足りないところも多いと思われるので、更にコロナ禍の課題として取り組んでいきたい。</p>

	発達段階に即した適切な乳幼児理解・援助	A	<p>今年度多くの職員が高評価を示した。発達に即した教材の準備、子どもたちが主体的に遊びに取り組む環境構成を工夫するなど、楽しい雰囲気の中で安心して自ら遊びに取り組めるような場や空間の工夫に力を入れたことが感じ取れた。また、そのために周囲の保育教諭と話し合ったりすることも必要に応じ行われた。</p> <p>未満児においてはチーム保育の中で、若い保育教諭をベテランの保育教諭が補う形で運営され、ひとり一人の子どもへの理解や援助を考えていくことができた。</p>
	小学校との円滑な連携	B	<p>昨年に続きコロナ禍、直接的な交流の場や会議は、時期によっては軒並み中止となることもあった。しかしその中でもできることを小学校側も考えて下さり、連携を図ることができた。</p> <p>運動会の旗拾いがなくなり、年長児が小学校に出かける機会が限られてしまう中、浜井場小学校の運動会が平日に行われたこともあり、年長児が見学させていただけた。また、実際には中止になってしまったが、上郷小学校とも交流の計画ができ、子どもたちが期待を膨らませ、活動に取り組めたことは良かった。</p> <p>年長のみならず、他の年齢・学年の保育教諭も「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」を念頭に置きながら、それぞれの活動を組み立てていくことに取り組めた。</p> <p>コロナ禍においては、学校と園はそれぞれが外部者となるため、直接的な交流等は時期を見て行ったり、計画通りにはいかない難しさがあったりする。直接子どもがかかわらなくても、教職員同士がお互いの部署の教育課程を理解し合うような研修に積極的に参加できるようにしたい。</p>
	職員の資質向上	B	<p>様々な研修が中止になった昨年度に比べ、オンラインによる研修の機会が増え、リアル研修ではないものの例年並みの研修参加ができ、職員の資質向上を図ることができた。保育士等キャリアアップ研修に非常勤職員も含め20名を超える職員が15時間の研修を受けることができた。今後保育の場で活かしていけるようにしたい。</p> <p>日々の保育活動の中で、子どもひとり一人の思いを的確に捉え、援助や活動の展開につなげていくことが保育教諭の役割になるが、まだまだ経験不足等による差が保育教諭の中にあり、保護者アンケートにもそれらの指摘があった。保護者の方からすると皆同じ保育教諭であり担任として信頼して下さっているので、その信頼に応えるべく資質向上に努め、自己研鑽に励んでいくようにしたい。</p> <p>園内研修についても、今年度は3学期に公開研究保育を予定していたが、休園等があったことでできなかった。園の重点目標にも絡み、職員がお互いに意見交換をし、資質を高める場を今後も設けていけるようにしたい。</p>

5. 自己評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

評価	理 由
B	<p>新型コロナウイルス感染拡大により、休園となってしまったことは残念なことであったが、その機会に感染予防のガイドラインを見返し、各学年・年齢に応じたガイドラインを作成した。子どもたちが自分でできること、年齢によって難しい場合は保育者がどのように補うべきか等、登園から降園までの時間に沿った、具体的な内容に作成できたことを今後活かしていきたい。また、職員の常勤・非常勤に関係なく園内の衛生作業に取り組み、様々な見方で保育を振り返ることができたことは評価できるのではないかと。</p> <p>今年度も保護者とのコミュニケーション不足を指摘されることがあった。直接園まで送迎される方ばかりではなく、スクールバス利用の方や延長保育利用の方などとのコミュニケーションの取り方を、今後工夫していく必要がある。昨年度の課題となった取り組みを、各自が時々見直し十分できているかの観点で確認していく必要がある。</p>

6. 今後取り組むべき課題（すでに実施し始めていることを含む）

課題	具体的な取り組み方法
家庭との連携	<p>休園になった際に、各家庭との連絡を密にできるよう、配布物の工夫やwebを使ったお便り等の配布を行い、できるだけ家庭での子どもの状態を把握できるように努めた。また、1ヶ月以上となった登園自粛期間があり、そこでも登園している子どもに比べ、家庭保育をしている子どもが孤立感を感じないように連絡を取り、同じ活動ができるように工夫してきた。この期間に行ってきた連携等を、通常保育に戻っても引き続き行っていくよう、それぞれの保育教諭が常に気を配り努力していきたい。</p> <p>保護者アンケートの中に、コロナ禍によって中止となったPTAに係わる行事について、保護者同士の親睦を図る機会が無かったことを指摘される声もあった。保護者同士が仲良くなることは、子育ての不安を話したり「それなら園に相談してみよう」という後押しとなったり、そこから生まれる信頼関係が子どもたちの集団をみんなで見守って行こうとする姿勢につながったりしていくと捉えることもできる。子どもを中心として園行事等を見てきたが、大きくは保護者も含めて考えていかなければならないことに気付くことができた。次のコロナ禍の課題として、予防との両立を考えていきたい。</p>

7. 学校関係者評価委員の評価

学校関係者評価委員の多くからA、またはBと評価され、「コロナ禍に於いて保護者も園も、共に皆頑張っている」との感想をいただいた。また、保護者アンケートにおいては、さまざまなご指摘・ご意見をいただいた。あげられた意見を丁寧に理解し、今後もひとり一人の園児を大切に、意義のある園生活を提供していくことを期待された。

8. 財政状況

公認会計士監査により、適正に運営されていると認められている。

※ 4, 5 の評価基準

A	達成されている	C	取り組まれているが成果が十分でない
B	概ね達成されている	D	取り組みが感じられない